

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第1回 三橋鷹女

鷹女という人

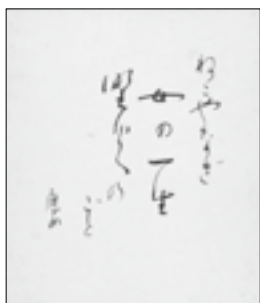
俳人・三橋鷹女は、明治32(1899)年12月24日、成田町成田(現在の田町)に父重郎兵衛、母みつの末子として誕生。

成田幼稚園、成田小学校を経て、明治45年、12歳で成田高等女学校(現在の成田高校)に入学。好きな教科は数学・英語・図画で、作文は苦手であった。運動はテニスが得意で、毎日放課後に練習していたという。少女時代から短歌を作り、図書館通いもよくしたが、とりたてて文学少女というほどのものではなかった。

大正5(1916)年、同女学校を卒業後、茶道や琴の稽古にいそしんだ。紫矢緋の着物に、麻の葉絞りの昼夜帯を締めて町を歩く鷹女の美しい姿に、町の人は「夢二の女(竹久夢二が描いた和服姿のなやかな娘)が通る」とささやいたという。



左/鷹女ブロンズ像
(場所:上町成田市第二駐車場前)、右/句碑
(場所:田町白髪毛墓地)



鷹女の自筆色紙

ねこやなぎ
女の一生
野火のごと

明治32年～昭和47年(1899～1972)

成田町成田(現在の田町)に生まれる。本名たか(通称たか子)。女流俳句の先覚者、昭和の女流俳人の最高峰の一人として才能を高く評価された。一方、師や弟子を持たず有名結社にも属さず、俳壇の中にあつて交流関係が極めて少なく孤高の俳人と呼ばれた。



この年、東京にいた兄・慶次郎のもとに身を寄せている。兄が師事する若山牧水、与謝野晶子に私淑して作歌にいそしんだ。

大正11年3月、22歳で館山市で歯科医院を営む東謙三と結婚。夫が学んでいたことから俳句に転向し、原石鼎が主宰する「鹿火屋」に入会し、夫と競詠する。俳号を東文恵とした。

昭和9(1934)年、小野蕪子主宰の「鶏頭陣」に転じ東鷹女と改名した。

昭和15年、24歳から42歳までの340句を収録した第1句集『向日葵』を刊行した。翌年、第2句集『魚の鱗』を刊行。この2冊によって俳壇における鷹女の地位は揺るぎないものになった。

女流俳壇の4Tと称される

この頃、昭和初期の上流俳句を支えた中村汀女、橋本多佳子、星野立子と共に俳号のイニシャルの頭文字を取り、「日本の俳句における4T」と評論家の山本健吉によって名付けられ、女流俳人の最高峰の一人となる。

昭和17年、兄・英治の死去により、後継ぎがなくなった三橋家を継ぎ、夫・謙三、長男・陽一とともに三橋姓となる。

その後、昭和27年『白骨』、同36年『羊歯地獄』、同45年『樵』を刊行。

昭和47年4月7日、72歳で死去。田町の通称白髪毛の三橋家墓所に永眠する。

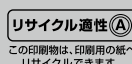
編集後記

今回の表紙はジングスカン。おいしそうで食べに行きたくありませんか。でも、肉の独特の匂いで苦手な人もいるのではないのでしょうか。何を隠そう私もその一人でした。それでも成田にある店で食べてみると臭みはなく、苦手を克服。今では好んで食べるようになりました。苦手な人もそうでない人も本市発祥といわれているジングスカンを食べに出掛けてみてはいかがでしょうか。

平成29年7月15日号 No.1343

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。